

一般社団法人日本国際看護学会 教育活動・研修委員会企画  
ワークショップ

# 中医学の自然と生命に関するホリスティックな視点から 健康と文化看護を考える

(フローレンス・ナイチンゲールの人間と自然の関係性に関する学説の根拠となるもの)

演者： 呉 小玉 (京都光華女子大学 看護福祉リハビリテーション学部)

司会者：大植崇 (兵庫大学看護学部 看護学科)

企画者：大植崇、呉小玉、堀込 由紀、横山 詞果、江角 伸吾

(一般社団法人日本国際看護学会 教育活動・研修委員会)

中医学のホリスティックな視点は、大きく分けて二つの側面から成り立つ。①人体内部の内的一体観（身体、精神、心理、情緒は不可分である）および、②人と自然・社会・文化の外的一体観（自然の絶えずな変化から生まれた社会や文化は人間の生活基盤であり、人と不可分である）という「内」と「外」に対する相対的な捉え方である。この相対的一体観のもと、人の生命を自然の枠内に置き、その人の習慣や情緒の変動と、食事・居住環境・気候などの変化との関わりから総合的に人間を理解する。フローレンス・ナイチンゲールは、「新鮮な空気、光、暖かさ、清潔さ、静かさの適切な活用、食物の適切な選択と供給—そのすべてを患者の生命力を少しも犠牲にすることなく行う」<sup>1)</sup>と人間の健康と自然の関係性について述べている。人の生命は自然の賜りものであり、自然環境の変化からも影響を受ける。自然とうまく調和できれば健康を保つことができるが、できなければ生命力が消耗されるというのが中医学の基本的な考えである。これはナイチンゲールの人間と自然とのバランスとアンバランスに関する考え方と通じるものである。

この「内」と「外」の相対的考え方は文化看護に適用できる。文化看護を考える際に、「自文化あるいは他文化」という内と外の両側面がある。現在、訪日外国人や在住外国人の増加に伴い、医療機関に受診される外国人患者数も増加している。外国人患者と医療者の間を隔てるものは言語の壁だけでなく、その言語の裏にある価値観、信仰、常識、生活様式の違いである。言語の壁は通訳などによって解決されやすいが、特に大人の外国人患者においては、自国文化が根付いた後に日本の文化とぶつかり、カルチャーショックから超え難い心の壁が生じやすい。疾病による内的一体の崩れと、医療者との壁による内・外の一体の崩れが重なり、生命力が消耗される。さらに、「壁」とは、大辞林の解説には、「人と人との間のへだて」とある。つまり壁の両側に影響を及ぼすため、医療側の人にも内外一体の崩れにより生命力が消耗される。満足度の高いケアを提供するためには、外国人と医療者それぞれの立場に立ち、相手の異文化を相対的視点で見ることが必要である。外国人患者と医療者の間の壁を取り壊すのではなく、理解することが重要であると考えられる。

この相対的考え方をベースに、本ワークショップでは、健康とは何か、健康と自然との関係性とは何か、その中の文化看護とは何か、どのように対象者もケア提供者もの生命力の消耗を最小限にすることができるかについて、中医学の自然生命理論の理解を深めていただく機会としたい。

Part1: 自然と生命の関係性を通して、健康と文化看護とは何かを一緒に考えてみる

Part2: 「情緒」の状態による健康への影響、文化によって情緒反応の違いを一緒に考えてみる

## 引用参考文献

1. Florence Nightingale 著 (1860): NOTES ON NURSING: WHAT IT IS, AND WHAT IT IS NOT. NEW YORK: D. APPLETON AND COMPANY 出版社. 1860.
2. 呉小玉著, 安達勇/小玉城医学監修 (2020): 中医看護学の自然生命理論—現代看護への活用、日本看護協会出版会, 2020